

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	野 添 聡
論文題目	ゲルマン語における動詞接頭辞 ge- - 機能的衰退についての通時的考察-		
(論文内容の要旨)			
<p>本論の目的は、ゲルマン語において動詞接頭辞 ge- がもつとされてきた完了相を表わす機能がどのように衰退し、類似形式と考えられる分析的な現在完了形とどのように交替したか、その過程を通時的な視点から解明することにある。本論の構成は以下の通りである。第1章では、『オットフリートの福音書』を分析対象とし、接頭辞 ge- がもつとされる完了を表す機能について考察するとともに、この文献に現われる ge- の用例とラテン語文献との対応関係の分析を行う。第2章では、ゴート語の『聖書』ならびにラテン語から翻訳された古高ドイツ語の翻訳文献を対象として接頭辞 ge- の機能的な衰退について考察することを述べる。第3章では、ゴート語の『聖書』および古高ドイツ語の散文翻訳文献を対象に、文献中に現われる接頭辞 ge- の用例とギリシア語およびラテン語の翻訳原典における動詞活用形の対応関係および動詞目的語における格の使用との関係を調査する。さらに、従来の接頭辞 ge- に関する研究ではあまり言及されてこなかった古アイスランド語における完了表現について考察する。</p> <p>まず第1章では、ドイツ語史の最古層をなす古高ドイツ語 (750-1050年頃) の文献である『オットフリートの福音書』(870年頃成立) の分析に基づいて、接頭辞 ge- の機能を実証する。接頭辞 ge- は、時代の経過に沿って徐々に機能を失ったことが想定される。本章では、古高ドイツ語期における接頭辞 ge- と、分析的な現在完了形の機能上の類似性を指摘することで、接頭辞 ge- の衰退の一側面を解明する。</p> <p>続いて第2章では、接頭辞 ge- の機能的な衰退の様相を、目的語における格の機能との関連において考察する。従来の研究では、アスペクトと動詞目的語の格の関係について相対立する主張が提示されている。しかし、先行研究では史料調査が十分に行われておらず、再考の余地がある。本章では、ゴート語および古高ドイツ語の資料の分析に基づいて、接頭辞 ge- の機能的な変遷の一過程を再建する。これら第1章・第2章では、西ゲルマン語・東ゲルマン語の史料を主たる対象として、接頭辞 ge- の機能に論及する。他方、北ゲルマン語における接頭辞 ge- とその類似形式については、従来の接頭辞 ge- に関する研究ではほとんど考察されていない。その理由は、北ゲルマン語の現存する古語文献の時代以</p>			

前に、接頭辞が語中音消失によって失われたことにある。

第1・2章を踏まえ、第3章では、古アイスランド語の代表的な文献である『詩のエッダ』における of の機能を検証し、古アイスランド語における完了表現について考察することで、北ゲルマン語における接頭辞 ge-の衰退と、その後継形式への変遷を跡付けようとしている。古期の北ゲルマン語では、現存する文献が書かれた時代には、すでに接頭辞 ge-はほとんど失われており、別の形式によって完了を表す必要があった。このため、先行研究では、古アイスランド語を含む北ゲルマン語において、分析的な現在完了形が接頭辞 ge-の代替形式の役割を担ったと考えられている。他方、従来の古アイスランド語に関する研究では、古アイスランド語における接頭辞の代替形式として、小辞 of の機能が議論されている。この場合、アイスランド語では、接頭辞 ge-に代わる完了表現の形式として、現在完了形と小辞 of が併存したことになる。この第3章では、小辞 of の機能に注目し、接頭辞 ge-の衰退と現在完了形への移行を論じるという手法をとっている。

総じて、接頭辞 ge-が衰退した根本的な要因は、印欧語からゲルマン語にかけて生じた、アスペクトを中心とした動詞体系から時制を中心とした動詞体系への変化にあると本論は主張する。すなわち、古期ゲルマン語において完了相を表す機能をもっていた接頭辞 ge-は、アスペクトの弁別を表す機能を失い、分析的な現在完了形にとって代わられた。その衰退の過程において、接頭辞 ge-は過去時制において現在完了形に類似する意味機能をもっており、現在完了形との機能上の競合を経て衰退したのだと結論づけている。このように、ゲルマン語において発達した接頭辞 ge- と、類似する機能をもつと考えられる形式と想定される現在完了形の発達の関係について印欧語レベルの視点から考察し、さまざまな学説が提唱されているゲルマン語の動詞接頭辞 ge-に関し包括的な捉え方を提示するに至っている。

(論文審査の結果の要旨)

本論は、古高ドイツ語(750-1050年頃)における動詞接頭辞 *ge-* の機能面での衰退の過程を、豊富な実例の分析によって実証的にたどり、そのメカニズムを統語論・意味論な観点から解明しようとしている。

一般に言語の歴史的変化において、類似する機能をもつ二つの言語形式が競合する場合、より新しい形式が当該の機能を担う主要な形式として定着し、旧来の形式が他の機能に転用されるということがしばしば生じる。今回の対象である接頭辞 *ge-* に関しても、この接頭辞が、現在完了形との競合の末に、他の機能を表示する形式に転用されたと考えることは言語変化として妥当な説明である。

印欧諸語を個別言語レベルで概観してみても確かに、印欧祖語の動詞体系はさまざまな形式で継承されてきた。本論で述べられているように、ラテン語では完了とアオリストは一つの形態へとまとめられ、現在完了形はアオリストの機能を兼ね備えることになった。また、ゲルマン語では、動詞語幹におけるアスペクトの対立が失われ、未完了語幹は現在時制へ、完了・アオリスト語幹は過去時制へと組み替えられた。こうして、現代のゲルマン諸語では、現代英語の現在進行形・現在完了形のように、分析的な形式を用いてアスペクトの区別を示すことも可能となった。しかしながら、歴史言語学の視点からゲルマン諸語全体を俯瞰するならば、これらの分析的な形式は比較的、後代の言語発達とみなしてよかろう。古期のゲルマン語においては、実際、こうした分析的な言語形式は未発達であり、動詞とその他の要素を組み合わせることで、ある種の代替形式が編み出されてきたという経緯がある。こうした背景からも、ゲルマン語における動詞組織の研究においては、歴史的発達の過程で失われたと考えられるアスペクト表現の代替形式を見出そうとする姿勢は画期的な試みと言えよう。本論の主眼である接頭辞 *ge-* も、ゲルマン語におけるアスペクトの指標と考えられ得る言語形式の一つに挙げられる。先行研究史の中でも注目を浴びてきた接頭辞の *ge-* に関して、その衰退した結果として現在完了形が発達したと捉える論点は、ゲルマン語史全体に関わる動詞体系の変遷の中で、アスペクト表現から時制表現への移行のプロセスとして捉え直す可能性を示唆しており、新しい知見であると言える。

中世の言語に目を向け、接頭辞 *ge-* をゲルマン語の動詞の文法組織に関わる要の一つとして注目しているのは、文法全体を見渡した総合的な視点からの本論の優れた貢献である。本論において、この小辞の変遷を記述することを通じ、ゲルマン語の歴史的変化、さらにはそこに内在する言語変化の方向性を説明しようとしている点は大い

に評価できる。もともと、本論は翻訳文献における原典の言語と翻訳言語の統計的な調査に基づいて議論しているが、古高ドイツ語の翻訳においてはすべてのラテン語の形式が厳密に画一的に翻訳されているわけではないため、機械的な対応関係を求める研究手法が実際にどこまで有効であるのか、なお検討の余地があり、今後の課題である。しかしながら、史料全体への目配せは十分にできており、複数の異なる翻訳形式に対応することにも申請者が配慮していることから、中世ラテン語の複雑なテキストのあり方に関する学識も備わっていることを確認することができる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年1月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降